

「なにかと 出会えるもよりみち」

加治木工業高等学校 専門員(司書) 岡元 隆子

電車で通学する生徒が「10分でも乗換時間があれば本屋へ行く」と話してくれたことがあります。一旦改札を出て駅ビルへダッシュ、売場を巡るだけ。家と学校を往復する毎日でない世界が見つかるところ。高校時代の私も時々、通学バスに乗らずに書店で仕事帰りの母を待ちました。

この春移転した加治木図書館へ行くのも、夕暮れどきです。島津義弘公ゆかりのこの地でミニ文学散歩を教わりました。JR日豊線のわきには古民家ギャラリーや文学記念館。生誕120年を迎えた椋鳩十の展示を見た後、出会った1冊は『リ

ラの花咲くけものみち』(藤岡陽子・著、光文社)です。著者は鹿児島島の農家を取材したとのこと。敬愛をこめて、椋鳩十が書いたあの物語が織り込まれています。

そこで、昨年の校内読書週間では「私のイチ推し本」と出会ったきつ

けを、生徒や先生方に紹介してもらいました。試しにA1解析すると、最も多いのは予想どおり「友だち」。他に「本屋」「アニメや映画」「SNS」「家族(両親・兄弟・祖母)」もあります。「本」のかたちは紙や電子、朗読サービスと増えまし



AI テキストマイニング分析 (ユーザーローカル社) によるキーワード